Newsletter
2015 | 冬 |
特定非営利活動法人ジェン
Vol.59

JEN
Japan Emergency NGO
20th anniversary

Photo by:佐藤 慧

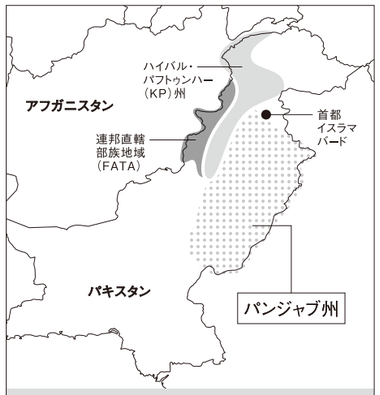
未来をつくる、みんなで創る。

終りの見えない状況に
困難と思える時もあります。
どんな時も、
手を止めることなく目標に向かい、
地域の人びとと共に考え、
作り上げていく。

そうやって、一歩一歩進むことが
毎日をより良く変えていくと信じ、
これからも、
JENは歩みつづけます。

特定非営利活動法人 JEN Newsletter Vol. 59 2014年12月20日発行

パキスタン洪水被災地 緊急支援を開始



○国名：パキスタン・イスラム共和国○首都：イスラマバード○人口：1億8,071万人（11/12年度 パキスタン経済白書）○面積：79.6万km2○人種・民族：パンジャブ人、シンド人、パシュトゥーン人、バルーチ人○言語：ウルドゥー語（国語）、英語（公用語）○宗教：イスラム教

テントに避難して暮らす子どもたち

パキスタンでは、この10年間で2回の地震、5回の洪水など、大きな自然災害が何度も起きています。今年の洪水被害も尽大で、被災者数は現時点で推定250万人に上ると言われています。※また、アフガニスタンとの国境に近い連邦直轄部族地域（FATA）とハイバル・パフトゥンハー州（KP州）での長年にわたる紛争も、大規模な避難民流出の原因です。

今年の8月～9月に発生した洪水の被災地では、多くの地域で支援が不足しており、全く支援が届いていない地域もあります。現地調査では、被災者の方々は生活用品、食糧品、仮設シェルター、衛生施設や生計回復などの支援を必要としていることがわかりました。JENは最も被害の大きかったパンジャブ州の中でも、特に支援が行き届いていない地域で、1000世帯（約6000人）を対象に、緊急支援を始めました。最低限の生活環境を取り戻してもらうために生活物資や衛生用品、冬に向けてキルト布の配布を行っています。

子どもが多い世帯を優先に支援します

流された木材を再利用している避難民

洪水で家が流されてしまった家族

また、戦闘を逃れ、安全な地域に避難しているFATA出身の国内避難民へは、貴重な生計・食糧源である家畜保護の支援を行っています。

多様な地理的条件、天候、行政システムが存在するこの国で、支援を必要としている人びとへ効果的に支援を提供するのは、容易ではありません。自然災害でも、地域により治安上のリスクを伴うため、活動許可を得ることが難しくなっています。

政府は30年以上、自然災害や地域紛争による避難民問題の対応に追われています。近年、世界的に人道危機が頻発していることもあり、パキスタンへの国際支援額は不足している状況が続いています。繰り返し発生する人道危機を止めるには、国際社会の協力が必要なのです。

JENはパキスタンでの数々の緊急事態への対応を通して、厳しい状況にある人々の自立支援を続けてゆきます。

※出典：国連人道問題調整事務所（UNOCHA）より。10月7日時点

自立を支える支援を今後も続けるために

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。最大で約40%が所得税の税額控除となります。
※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。

郵便局から
00170-2-538657
口座名 JEN

遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。

インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
（VISA、MASTER、JCB、AMEX）

生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。

JEN
Japan Emergency NGO
20th anniversary

特定非営利活動法人ジェン（JEN） 東京本部事務局
〒162-0824 東京都新宿区揚場町2-16 第二東文堂ビル7F
TEL：03-5225-9352 FAX：03-5225-9357
E-mail：info@jen-npo.org ホームページ：http://www.jen-npo.org

JENでは、下記のfacebookファンページ、Twitter公式アカウントを運用しています。
facebook 「NGO JEN」
Twitter 「NGO_JEN」

今、必要とされている支援を。

武力勢力ＩＳＩＳによる戦闘地域の拡大により、
イラク各地で２００万人を超える国内避難民が発生しています。
ＩＤＰキャンプで冬を迎える人びとや学校に通えない子どもたち。
ＪＥＮは、新たに支部を開設し、緊急支援を行っています。

イラク

2013年、衛生教育活動の一環で行った、学校でのガーデニングの様子。「こんな平和なひと時を再び」と人びとの想いはつのります。

激化する戦闘と、２００万人の国内避難民

２０１４年６月、武装勢力ＩＳＩＳがモースル行政区域を占領した後、クルド人自治区を除く北部地域を中心に戦闘地域が拡大しました。サラハディーン、アンバール、ディアラ、キルクークなどイラク各地では、今も戦闘が繰り広げられています。その結果、イラクは現在、約２００万人の国内避難民（Internally Displaced Persons 以下、ＩＤＰ）を出す非常事態に陥っています。宗教過激派のテロ行為や宗派対立による殺人などが日々増加し、絶え間ない混乱のため、住む場所を追われた人びとの数は増え続けています。ユニセフによると、これらＩＤＰのうち約50万人が子どもで、また約49％が北部のクルド自治政府に受け入れられています。彼らの多くは着の身着のまま避難しており、財産や生計手段を失っています。また、国境検問所付近での軍事活動により、流通網が絶たれ、深刻な物資不足と物価の高騰が発生しています。

あまりにも過酷なＩＤＰの生活

イラクの雨季は、冬の厳しい寒さと重なります。ＩＤＰの多くはＩＤＰキャンプ内外のテントで暮らしており、その生活は非常に過酷です。ＪＥＮは、各地のキャンプを訪れ、人びとの生活環境を調査しました。十分な防水加工がされていないテントは雨水が漏れ、水はけの悪い土地では中まで泥水が入り込みます。また、毛布などを直接敷いたり、粗末な簡易ベッドを置いて寝起きしているため、浸水によって寝床や家財道具が濡れてしまい、これらのものを外に出して乾かしていたり、ビニールシートを敷きなおしたりといった光景も見られます。また、キャンプでは暖房器具もありません。人びとは遠くまで枝を拾いに行き、それを燃やして暖をとります。小さな灯油コンロで料理をすることもありますが、狭いテントの中で火を使うため、火災などの二次被害が発生しています。多くの人びとが困難な状況にある中、政府はいまだ有効な解決策を見いだすことができていません。また、各地が激しい戦闘下にあるため、治安上の問題から、国連機関や国際ＮＧＯなどの活動は限られた地域にとどまっています。キャンプでは常に医師も医薬品も足りておらず、簡単な診察や治療しかできないのが現状です。そんな中、妊婦はリスクの高い出産を強いられています。イラクのＵＮＨＣＲ（国連難民高等弁務官事務所）によると、キャンプではこれまでに子どもが約１５００人亡くなり、流産が１３８件あったと報告しています。町の病院はキャンプからは遠く、物価の高騰に伴い医薬品の価格も上がり、一般市民には手が届きません。

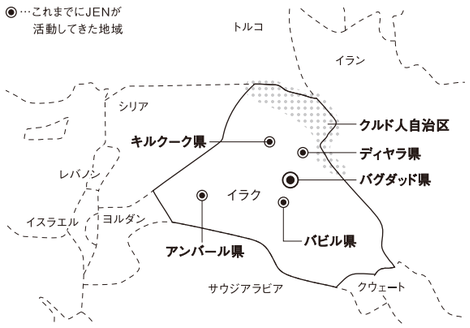
JENが新たに事務所を立ち上げたクルド人自治区にあるIDPキャンプ。

避難先で不安を抱えた生活をおくる子どもたち

ＩＤＰとなった子どもたちの多くは、学校に通うことができない状況にあります。キャンプに学校はなく、キャンプから町の学校へは歩いて通うことができないほど遠く離れています。また、学校がＩＤＰのシェルターとなり再開できない状態にあったり、教室やトイレなどが足らず、新たに子ども達を受け入れることができないケースも多く存在します。教育分野の緊急支援対策は、ほとんど取られていません。子どもたちが教育を受けられないと、彼らの将来に厳しい現実を突き付けることになります。

イラクは今、ＩＤＰ問題を解決し彼らの苦しみを和らげるための大規模な国際支援を必要としています。それも緊急に、です。この状況を受けて、日本政府や日本の皆様の多くのご支援により、ＪＥＮは、多くの人びとが身を寄せるクルド人自治区内に支部を開設し、緊急支援を始めました。この支部を拠点に、ＩＤＰの約半数が流入しているクルド人自治区内で、日用品配布をはじめ物資配布を中心に緊急支援を開始しています。また、より支援が届きにくい地域にて、緊急支援を展開するための準備を進めています。今後は、もともと脆弱で、この戦闘下でさらに疲弊している上、支援が届いていない地域を対象に緊急支援を行ってゆきます。これまでの紛争地域での緊急支援の知見を活かし、子どもたちが安全に、安心して教育を受けることができるよう、学校の衛生施設の改修や、教師や生徒に対する衛生教育を実施します。またＰＴＡ活動を通して、プロジェクトを推進するためのコミュニティの役割を活性化しながら、市民の間にも衛生意識を広めていきます。今、イラク人の大多数が望んでいることは、尊厳のある安定した人生を送ることです。そのためには、イラクの人びと自身が未来を描き、団結しなければなりません。ＪＥＮは、彼らに寄り添い、支えていきます。

イラク周辺地図



先生の意見を取り入れながら、教材をつくるJENスタッフ（2012年）

新しい教材（卓上ゴミ箱）で楽しく学ぶ、生徒たち（2012年）

イラクを取り巻く緊急事態に迅速・柔軟な支援活動を行います。

イラクでは、今、武装組織によって国の多くの部分が占領されているため、人びとは住んでいた土地を追われ、安全を求めて北部のクルド人自治区やその周辺の地域に逃れています。避難先では、大人も子どもも、生活に必要な物資が不足するなど劣悪な環境での暮らしを強いられています。特に子どもたちにとって、健康や安全が脅かされる過酷な状況下では、安心して学校へ通うことができません。イラクを取り巻くこの緊急事態に、政府や国際機関は国内避難民への緊急支援に乗り出していますが、支援のスピードは上がっていません。

２００３年以来、ＪＥＮはイラクで活動を行ってきました。戦闘下にある現在も、また、今後戦闘が止んだ後も、11年間培ってきた経験と実績をイラクの復興に活かしてゆきたいと願っています。

建設途中の建物が、IDPの避難所として使用されています。完成していない建物で暮らすことは、危険が伴います。

一日でも早く、イラクに平和を。緊急募金を受け付けています。

支援のお願い

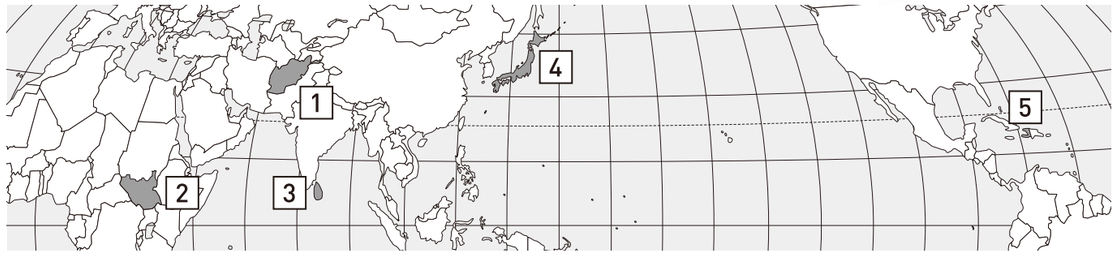
郵便局、またはJENホームページからクレジットカードでもご寄付いただけます。

〒 郵便局からご寄付いただけます。
○郵便振替口座　00170-2-538657
○口座名　JEN

インターネットから、クレジットカードでご寄付いただけます。
○URL　www.jen-npo.org
○VISA、MASTER、JCB、AMEX

よりよい未来を、自分たちの手で。

JENが誕生して、20年。
これからの新しい20年がより良い未来になるように。
スタッフや、現地で活動に参加する人たち
一人ひとりの活動は日々、進化しています。



1 アフガニスタン

市民一人ひとりの参加を

パルワン県の小児病院に100床の小児用ベッドを提供しました。

今年JENは、パルワン県での学校施設整備と衛生教育、パグラーン県・バダフシャーン県での物資配布などを通した洪水被災者緊急支援の他、パルワン県チャリカ地区の小児病院へのベッド提供、助産師への家族計画研修など、妊産婦や子どものサポートも行いました。来年もこれらの活動を継続していく予定です。

今年の選挙で発足した新政府は、教育改革、司法改革、人権や保健・社会サービスに重点的に取り組むことを約束しています。JENは、国がこの大規模な計画を達成していくためには、市民一人ひとりの参画が大切だと考えています。そこで、政府の手が届きにくい草の根レベルで、学校の環境を整える、安全な水を確保する、衛生教育を広めるなど、生活の基盤を整える活動を行い、国の復興に貢献してゆきます。

引き続き、日本の皆様に関心を持ち続けていただく事が、アフガニスタンの人びとにとって大きな力になります。来年もよろしくお願いいたします。

2 南スーダン

逆境に負けない力を育てる

コミュニティの人びとと共に、衛生知識を学ぶワークショップを行います。

南スーダンは、2011年7月にスーダンから分離独立を果たしました。独立は南部スーダンの人びとの悲願でしたが、2013年12月、首都ジュバでクーデター未遂事件が発生し、現在も不安定な治安が続いています。2005年の包括和平合意（CPA）以前は、集落の共同体で村人が協力して小学校や教会等の公共施設を作り、自分たちで管理していました。しかし、CPAによって6年間の自治が南スーダンに与えられると、一部の人びとは南部自治政府へ安全な水、学校や病院の整備などの公共サービスを期待し、自助努力を辞めてしまいました。そこで、JENは、2007年から水・衛生環境の改善を目指す支援活動を村人主導で行い、逆境に負けない力を鍛えることも視野に入れた活動を積極的に取り組んでいます。村人と共に考えて作り上げる活動を通して、再び自助努力の機運を高め、衛生環境改善への自発的な取り組みや、改善後の環境維持・管理ができるようになることを願っています。

3 スリランカ

支援活動が活かされています

北部ムライティブ県で多年生植物の苗を配布しました。

今年は、北部と東部にて農業用井戸70基の建設、40以上の井戸管理委員会や農業協同組合の形成をサポートしました。また、各地で共同コンポーストの作業場の設置、給水ポンプや配水ホース、種・苗のなどの配布、コミュニティ強化のための農業研修なども実施しました。先日、事業地を訪問した際、配布した種・苗と研修で得た知識や技術が活かされていることを確認しました。例えば、活動終了後に調査した70世帯中66世帯が収入面でスリランカの貧困ラインを超えたという嬉しいニュースがありました。来年も、北部で農業生計回復支援やコミュニティ強化の活動を行います。これにより、長期にわたり紛争の影響を受けた帰還民やコミュニティの生計が向上・安定し、人びとが自立した生活を営むことができるようになることを願っています。人びとが協力して生活を改善する力を身に付け、離散したコミュニティが再建・活性化し、地域に安定と平和が訪れることがJENの目指すゴールです。

4 石巻

本格的な復興を目指して

公園造りを通じた子ども会再建。

JENは、東日本大震災2週間後に被害が最も甚大であった地域のひとつである石巻市に事務所を開設しました。

石巻市では、発災から3年と10ヵ月が経過した今もなお、住まい・生活に関連する安全安心・雇用など生活に密接した分野の復興が遅れています。

JENでは地域の本格的な復興に向け、現地の今のニーズに合った最も緊急性の高い活動を行うために、大規模な調査を行う予定です。中長期的な視点を組み入れた支援活動を行っていくことにより、住民一人ひとりが自発的に行動を起こすきっかけとなることを目標にしています。

被災地では、東日本大震災をきっかけに防災に対する意識が向上しています。全国でも見られる人口流出による過疎化・高齢化などの現象は、被災地では特に加速しています。

JENの支援活動により、石巻だけでなく、全国が抱えるこれらの社会課題の解決にも貢献できればと願っています。

5 ハイチ

国の安定と発展に貢献します

JENが建設したキオスク型給水施設を使っている人びと。

ハイチでは多くの課題を抱えつつも、嬉しい進歩もありました。例えば、政府の水衛生局が発表したガイドラインにより政府やNGOの足並みが揃ってきたことです。JENでは、水・衛生環境の改善事業を行っていますが、今までは異なる支援団体によって規格の異なる部品を使ってきたため、他団体が建設した給水施設を修理する場合、部品が調達できないなどの問題が発生していました。規格の統一により、それらの問題が解消され、将来的にも改修が簡単になります。

また、今年ハイチでは蚊を媒介にした感染症のひとつ、チクングニア熱の大流行がありましたが、JENはその予防活動に積極的に取り組みました。2010年から大流行したコレラは、JENが担当している地域では2014年以降現在まで発生していません。この状態を保つために、来期も引き続き衛生促進活動を行います。そして新たに、学校や保健所でも衛生促進活動を開始します。

これまで長く政情が不安定だったハイチですが、今後の発展には政治的安定が必要です。ハイチの未来と発展を担う住民一人ひとりが安全な水へアクセスでき、健康な生活を送れるよう、JENは来年も国の復興に貢献してゆきます。

EVENT REPORT

JEN創立20周年イベントを開催しました。

2014年10月26日、JENの創立20周年記念イベント、「こうなると、世界は楽しい！～よりよい社会を自分たちの手で。これまでの20年、これからの20年。～」を開催しました。

第1部では理事・事務局長の木山啓子より、JENの20年の歩みと、これからの20年、JENが取り組んでゆくことをお話させていただきました。第2部のシンポジウムでは、文化人類学者である竹村真一氏による基調講演のあと、安藤美姫氏（プロフィギュアスケーター）、漆紫穂子氏（品川女子学院校長）、大久保公人氏（One Young World Committee Chair）をゲストにお招きして、パネルディスカッションを行いました。教育、人材育成、防災、アスリートなど、それぞれのご専門分野の視点から、より良い未来のためのアクションについて、意見交換が展開されました。第3部の懇親会では、ライブペインティングと、チャリティーオークション、協賛企業様の素敵な商品が当たる「特別抽選会」を行いました。ご来場頂いた多くの皆様と、JENスタッフが交流させて頂く楽しいひと時となりました。

ご来場くださった皆様、本当にありがとうございました。お会いできなかった皆様、次の機会にお会いできることを願っております。今後ともJENの活動にご賛同いただけますよう、よろしくお願いいたします。

及川キーダ氏と、Fried Prideによるライブペインティング。

各分野の専門家が集い、未来を語り合ったパネルディスカッション。

竹村氏による講演は「触れる地球」を用いて。

2015年1月20日（火）日本ワイン・チャリティパーティを開催します。

毎回、多くの皆様にご好評いただいているワインのチャリティイベント。日本ワインと数種類の軽食盛りあわせをお楽しみいただけます。

詳細・参加申し込みはJENのウェブサイトにて!
http://www.jen-npo.org/wine2015/

1日50円からできる継続寄付
「生きるちから マンスリーサポーター」

年末キャンペーン実施中!

2014年
12月1日（月）
～31日（水）

世界各地で人びとが元の暮らしを取り戻す道のりをサポートします。長くかかる支援だから、少しずつ続けてみませんか。自分で決めた金額で月々1500円（=1日50円）から始められます。

お申し込みは「生きるちからマンスリーサポーター」ホームページから
http://www.jen-npo.org/monthly/

期間中にお申し込みいただくと、JENの「20年のストーリー」をまとめたエッセイブックをプレゼント。

「イラク・緊急報告会」
～今、イラクで起こっていること～

○日時：2015年2月10日（火） 18：30 - 20：00（予定）
○場所：MOTTAINAIステーション
千代田区一ツ橋1-1-1パレスサイドビル1F
［東京メトロ東西線 竹橋駅 1b出口から徒歩1分］
○報告者：黒木 明日丘（イラク事業担当）

お申し込みは info@jen-npo.org または 03-5225-9352 まで。氏名、メールアドレス（または電話番号）をご連絡ください。

事務局長木山啓子とJENスタッフの

往復書簡

HG comunity session：衛生知識の普及は、地域住民への理解促進から。

Cloth Distribution：キャンプでの衣料配布。綿密な打ち合わせをするトゥルクさん（右）。

啓子さんへ

私たちがシリア難民支援の活動を開始した2012年９月、
シリアとヨルダンの国境や、
ザータリ難民キャンプは混乱を極めていました。
乾燥して砂埃舞う中、支援物資を待つ人びとで
混み合うキャンプの入口、
強い日差しの中ミルクを求めて立ち尽くす妊婦。

私たちはキャンプの住民たちに寄り添い、
この過酷な環境下で彼らが抱える深い悲しみを
少しでも和らげようと努力してきました。

その年の11月、雨季そして冬はすぐそこでした。
私たちは、雪が降る前に、キャンプの約５万人の住民に
少しでも早く、公平に衣類を届けるための方法を考えました。
配布に協力的な住民と話し合って配布日時や方法を決め、
家族構成に合わせ、200種類の衣類パッケージを
準備しました。衣類を受け取った後の人びとの安堵の表情や、
その衣類を着た子どもたちがキャンプ内で嬉しそうに
走りまわっていた姿が今も私の目に焼き付いています。
衣料配布でJENと出会った人びとは、
のちにJENの活動に敬意をはらってくれるようになりました。

キャンプで活動を始めて３年、
今も８万人の人びとが、ここに暮らしています。
そしてJENの活動は、住民の協力を得て拡大しています。
担当する３つの地区での水衛生環境の維持・管理の統括、
同地区内にある公立学校での衛生促進活動、
キャンプ住人が編集チームを組んで月に一度発行している
情報誌「ザータリマガジン」のサポート、
冬に向けて、３年目となる衣料配布などを行っています。

避難生活の長期化により、人びとの不安、
彼らを受け入れるホストコミュニティへの負担は
更に大きくなります。
私たちはこれからも支援活動を通して、
シリア難民の人びとが
一日でも早く故郷に戻れる日が来ることを願っています。

キャンプマネージャー
モハンマド・トゥルク

トゥルクさん

まだお目にかかったことはありませんが
トゥルクさんの大活躍は、日々の報告からよく知っています。
ザータリキャンプで衣料配布の『JENらしい』事業内容を、
とても誇らしく思っています。

キャンプが新設され、毎週千人単位で
難民の方が激増している大混乱の時期に、
テントを一軒一軒回って状況調査をするということは、
こうした大規模配布ではあまり行われません。
それを敢えて実施することで、200種類のパッケージを作り、
結果として本当に必要とする人たちに必要な衣料を必要な数だけ
過不足なく配布することができたのでしたね。

当時のザータリキャンプでは、
配布をすれば必ず暴動で終わっていましたが、
トゥルクさんたちは配布のやり方や時間帯など
実施方法に様々な工夫を凝らし、
暴動が起きずに大量配布が行われた
初めてのケースとなったと聞いています。
トゥルクさんのお便りに、
難民の方々がJENに敬意を表してくれているとありました。
きっとそれは現場で働く皆さんが、
難民の方々を尊重して、
日々支援活動を実施しているからだと思います。

人は、誰かの役に立てた時、
自分に誇りを持ち、力を発揮できると思います。
それは、難民になるという厳しい状況にあっても同じです。
単に衣料を配布しただけでなく、
自分に誇りを持てる機会も提供できた事業を
トゥルクさんたちが実施してくれたことを、
私も誇りに思っています。

木山 啓子